

甲府ルーテル教会にて（2）

望

——ロマ書第8章18～30節——

1976年8月15日（甲府）

小池辰雄

希望の神さま 死を超えた世界の偉大な確実な希望 ちゃんと天国へ行く道がある キリストが天国体 まず、神主義ということ 希望も即ち現 希望は未来の新天地、終末の世界最後の霊肉渾然たる救い キリストという原始力 福音は万人のために絶対無条件 癌は根底からは治されている 信は同時に大希望につながる 私たちはキリストの栄光の姿に化せられる 幕屋の構造

【ローマ8・18～30】

18 われ思うに、今の時の苦難は、われらの上に顕れんとする栄光にくらぶるに足らず。19 それ造られたる者は切に慕いて神の子たちの現れんことを待つ。20 造られたるものの虚無に服せしは、己が願いによるにあらず、服せしめ給いし者によるなり。21 然れどなお造られたる者にも滅亡の僕たる状より解かれて、神の子たちの栄光の自由に入る望みは存れり。22 我らは知る、すべて造られたるものの今に至るまで共に嘆き、ともに苦しむことを。23 然のみならず、御霊の初の実をもつ我らも自らの心のうちに嘆きて子とせられんこと、即ちおのが体の贖われんことを待つなり。24 我らは望によりて救われたり、眼に見ゆる望は望にあらず、人その見るところを争でなお望まんや。25 我等もし其の見ぬところを望まば、忍耐をもて之を待たん。26 斯くのごとく御霊も我らの弱を助けたもう。我らは如何に祈るべきかを知らざれども、御霊みずから言い難き嘆きをもて執成し給う。27 また人の心を極めたもう者は御霊の念をも知りたもう。御霊は神の御意に適いて聖徒のために執成し給えばなり。28 神を愛する者、すなわち御旨によりて召されたる者の為には、凡てのこと相働きて益となるを我らは知る。29 神は予じめ知りたもう者を御子の像に象らせんと予め定め給えり。これ多くの兄弟のうちに、御子を嫡子たらせんが為なり。30 又その予め定めたる者を召し、召したる者を義とし、義としたる者には栄光を得させ給う。

●希望の神さま

聖書の伝えている神さまは、これは希望の神さまです。ということは、創造の神は新天



新地を来らせる——創造の完成ですね——目的を持っていらつしやる。どうも、仏教の方にはこの目的というものがあまりなさそうですが。聖書の啓示の神はハッキリと、初めと終りを——終りと言っても終ってしまうのではない。永遠の世界に入るわけですから——そういう大希望を、大目的を、また別な角度で聖書的な言葉でいうと、約束を持っていらつしやる。「旧約」、「新約」といいますが、旧約ではキリストの降臨が旧約で、新約はキリストの再臨に向っている。即ち、キリストの再臨、天地の最後の完成、それを持っているということは、大希望があるということ。我々の人生がもし、この地上だけであつたら、それこそ旧約聖書にあるとおり、

「空の空なるかな、すべて空なり」

です。聖書の中には人間が言っているところの、ニヒリズムであろうと、ロマンティズムであろうと、イデアリズムであろうと、何でもあるんです。ただし、それは全部、もう一つ大きな高い次元からそれを掌握してしまっていますから。神さまがなければ、これは

「空の空なるかな、すべて空なり。日の下に新しきことなし」

です。ところが、キリストが現れたということは、日の下に新しいことが現れたということとです。旧約だけだったら、正直、伝道の書のコーヘレスの言っているとおりですが、ところがどっこい、この新しきことが来た。これはキリストです。「世界の四聖」なんていつたつて、キリストは桁が違う。

我々は希望がなかったら、正直、つまらないですよ。パウロが言っているとおり、「明日死ぬかもしれないから、勝手なことをしよう」てなことに、パウロが一般の希望なき人のことを言っていますが。マルチン・ルターさんが、

「もし、明日、この世界が終りとなるとしたら、お前はどうかするか」

と問われたときに、ルターは、

「世界が明日終つても、私はリンゴの苗木を植える」

と答えた。ということは、神に希望がつながっている業は決して空しくないといいことをハッキリと実存的に語っている言葉です。これは願望でもなければ、空望でもない。希望というのは、人間が自分で考えて、「こんな望み…」ということは一般の言葉では希望というけれども、それはもし分ければ「願望」であつて、聖書がいうところの希望というのは上からくるんです。さきほど、「本願」という言葉を書きましたが、この本願的な意味における希望です。

主の祈りの、

「御国を来らせたまえ」

というのは正にこれは希望の言葉ですからね。

「あなたの新天地が来るように」

と。旧約聖書の詩篇130篇に、



「ああエホバよ、われふかき淵より汝をよべり。² 主よねがわくはわが声をきき、汝ののみみをわが懇求のこえにかたぶけたまえ。³ ヤハよ主よなんじ若もろもろの不義に目をとめたまわば、誰かよく立つことをえんや。⁴ されどなんじに赦あれば、人におそれかしこまれ給うべし。⁵ 我エホバを俟望む。わが靈魂はまちのぞむ。われはその聖言によりて望をいдаく。

「聖言によりて望をいだく」という。自分の勝手な考えではない。

⁶ わがたましいは衛士があしたを待つにまさり、誠にえじが旦をまつにまさりて主をまつり。⁷ イスラエルよエホバによりて望をいだけ。そはエホバにあわれみあり、またゆたかなる救贖あり。⁸ エホバはイスラエルをそのもろもろの邪曲よりあがないたまわん。」（詩篇130・1～8）

とある。詩篇150篇のうちで、もしその中から十篇を選ぶとすれば、その中に130篇はどうしても入ってくるでしょう。大体、詩篇は短い詩篇がいい。23篇とか、46篇とか。キリストも祈るときに、

「あまり言葉をやすな」

と言われた。主の祈りも短い。この130篇は新約のキリストの光で読めば、全くこの中に福音があると言ってもいいわけです。

●死を超えた世界の偉大な確実な希望

「待ち望む」という。ヘブライ語では、この「待ち望む」という言葉は「信頼する」という字と同じような意味です。イザヤ書の40章にも、

「然はあれどもエホバを俟望むものは新なる力をえん。また鷺のごとく翼をはりてのぼらん。走れどもつかれず、歩めども倦ざるべし。」（イザヤ40・31）

とある。「信頼する」ということと「希望」ということが同じような言葉で使っている。

希望は上から臨んでくるわけです。キリストも正に大希望を持っておられた。我々は普通では、若い人は春秋に富んでいるから、大いに希望があるけれども、年とつてしまうと希望がなくなるような顔している。そうじゃないです。いよいよ、私なんかも希望満々であります。というのは、この地上の人生はまだ序曲にすぎないと思っていますからです。本局は、本番は向う側。地上は序曲。

そういうことで、聖書そのものが大希望を掲げているのは、言うまでもなく、ヨハネ黙示録です。ヨハネはパトモスで驚くべき啓示に合いました——「黙示」というのは本当は「顕示」です——明らかにいろんな光景を見させられて、聖言をいただいて、どんどん書いた。決して、想像で書いたのではない。

私たちにもし、人生にそういった死を超えた世界の偉大な確実な希望がなかったら空しいです。ところが、そういう希望が確実にあるので、私たちは、クリスチャンというのは



永遠の青年であるわけです、男性も女性も。

キリストが伝えていらつしやったとき、使徒たちが神の言を伝えていたこの現実は、もう今にも神の最後の日来る、「かの日」は来る。旧約の預言者たちが預言していたところの事態はキリストが来られたので、もうすぐ間近だと。その時にはまだ生き残っている者もいるくらいに、彼らは正直思った。キリストの言にもそういう言葉がある。そういった終末の迫った——結婚なんかしてもしなくても問題じゃないという、パウロがそういった調子ですから——神の国を真に近々に、目^{もく}睫^{しよう}の間に待ち望んでいるような現実において書かれているのがこの聖書です。

ところが、二千年たっても、そういった国は来ない。といって、みんないい気になっていたらいかんです。いよいよ、延びれば延びるほど、希望の質は更に強化しているわけです。審判を神さまは延ばしていらつしやるだけで、それだけまた深刻なことになる。神さまはなにも審きたくはない。どこまでも万人を救いたいものだけでも、審判をもたらせせるのは人間の側の罪です。もし、原子力兵器がまかり間違つて使われたら、えらいことになるというわけです。

まあ、人間というのはバカみたいなものですよ。もう分かりきっているのに、軍備は密かに強大になっている。いかにそれがマイナスであるかは分かっているのだけでも、お互いに警戒して、軍備のバランスでただ偽りの平和があるだけのなし。バランスが破れたら、どういふことになるか分かん。人間というのは救い難いわけです、正直。どう考えても。

●ちゃんと天国へ行く道がある

「私は救いは要りません」という人は一体いるんですか。信仰のない人でも、「私は救いは要らん。私はもう永遠に生きます」と、誰が言えるか。だから、私は、

「信ずると信じないにかかわらず、人間はすべて宗教人である。万人はこれ宗教人である」

とハッキリ言う。

「宗教」という言葉がまた躓きになる。「レリギオン」という言葉は、「レリガール」「再び結ぶ」という「再結」という意味です。

「結び返しをしなくてはいかん」

ということ、です、「宗教」という字は。

「神さまとの間を結び返せ」

というのが「宗教」という言葉ですから。「宗教」なんていう訳が本当は間違っている。「再結」と言えがいい。この結び返しがないと、ちょうど糸の緒が切れた風みたいなもの、錨が外れた船みたいなものだ。



そういうわけなので、誰でもが、万人が救いを要する。だから、万人は信仰を要する。これをみんないい加減に取り扱っている。しかし、魂の世界はごまかしがきかんですから、いい加減に取り扱っていれば、地獄へ行く。

仏教でも、極楽・地獄という。キリスト教でも、天国・地獄という。霊界にはちゃんとこれがある。さきほど、霊法ということを言いましたが、霊的法則は恐ろしいですから、いい加減なことをしていると、いわゆる祟り^{たた}というのが来るです、正直。

「悪人が栄え、義人が苦しむのはどういうわけだ」

とエレミヤは言いました。また、ヨブも苦しみました。けれども、神さまはそっぽを向いているようだけれども、どっこいそっぽは向いていない。解決は、地上で終らなければ、次の世界で解決が来る。むしろ、地上で解決された方がありがたいわけなので、地上で解決しないと、いい気になって向こう側に行ったら、とんでもないところに連れて行かれる。地上の在り方が次の世界の地位を決定しますからね。

誰が天国へ行くか、誰が地獄へ行くかは、誰も人間が品定めできない。神さまだけがなさる。いわゆる信仰があっても、どっこいということがあるし、「しんこう」の「し」の字も知らなくても天国へ行く人もあるでしょうし。その判断は分らない。

とにかく、福音に接したからには、ちゃんと天国へ行く道があるんですから。これは本当にその絶対恩寵の中に入って行かなくては。恩寵は絶対ですから。

「これだけのことをしたから、お前は地獄行きだ」

と、そういう定め方はなさらない。そこで、さきほど申し上げた、信の世界が極めて土台であることは言うまでもないんです。

そういうことで、聖書は、明らかに目的を持っている。約束を持っている。希望を持っている。目的も約束も希望も同じことです。そういう世界であるから、我々は地上でどんなにそろばんが合わず、マイナスをとったようでも、実は天の歴史に——人間の書いた歴史ではない。神さまが書いてらっしゃる歴史の中に——生命の書の中に刻まれる。黙示録にあるように。そういう人は天界に行く。黙示録でハッキリ言われているとおり。

さきほど、ローマ書8章1節から17節のところを、御霊における信仰を土台としてお話ししましたが、次に18節から30節までを「望」と題して——なにも希望ばかりではないですよ、そこに希望の面が大いに表れていますから——お話します。

18 われ思うに、今の時の苦難^{くるしみ}は、われらの上に顕^{あらわ}れんとする栄光にくらぶるに足らず。

現世においてどんなに艱難を負っても、来るべき世界、神の国におけるところの栄光——それが希望の内容です——それに比べることができないという。

「我に従わんと思う者は己が十字架を負いて我に従え」

という。地上で天国人にならんとすれば、何らかの意味において苦難を負う。十字架を負



うということは、クリスチャンの使命であり、またそこに栄光がある。そういう意味でパウロはこう言っている。パウロが遭った苦難というものは大変なものです。コリント後書11章で、パウロはあれだけたくさん数えあげた。普通の人なら、もう参ってしまっているですよ、あれだけの苦難に遭えば。40に1足りない39回の鞭打ちにもあっている。普通なら参ってしまう。パウロは参らない。それはキリストの烈々たる聖霊の力が来ているから。牢屋に繋がれても、祈りの世界で鎖が切れたりする。使徒行伝にあるとおりです。パウロもペテロも驚くべきことを経験してます。聖霊の力というのは、いろんな意味における力を持っていますから。

この希望はとうてい比べることができないという。

¹⁹それ造られたる者は切に慕いて神の子たちの現れんことを待つ。

今度は、人間ばかりでなく被造物もみな呻きを持っている。希望を存在的に持っている。蛙が鳴いているのも何もかもこれは希望の歌である。祈りの歌である。そういう意味において、呻き、嘆き、悲しみもみなこの希望において――

「この世の憂き悩みもやがて楽しき歌と変わらん」

という聖歌がありますが――パウロは自然界の呻き、嘆き、叫び、これを聞いている。人間の罪のために自然界にそういういろんな苦難が来た。

●キリストが天国体

大体、神さまは創造のときには、

「すべて善かりき」

と書いてある。善かったのが、なぜ悪くなってしまったか。いきなり、楽園に進展していくはずのものが、楽園喪失、パラダイス・ロストになってしまった。これはミルトンが書いているとおり、

「人間の最初の不従順がもたらした」

という。即ち、直線的に与えられているはずの希望が屈折してしまった。失望に変わってしまった。ということとは、人間の罪の故です。神さまから離れたから。だから、「再結」しなければならない。再び結び返さなくてはならない。その結び返しを本当にやってくだつたのがキリストです。だから、キリストはパラダイス・リゲインドでパラダイスを回復してくださったから、キリスト自身が、

「天国は近づけり」

と仰った。「近づいた」というのはキリストが天国体だから。キリストがいらっしゃるところには天国がある。

「天国は汝らのうちにある」

とも言われた。汝らの「うち」というのは「うち」でもあり、「あいだ」でもある。即ち、



キリストを受けとり、聖霊にあつて御霊のキリストを受けとつているところには、すでにそこはパラダイスです。十字架上の片一方の盜賊に、

「汝は今日、私と一緒にパラダイスだ」

と言われた。私はあの言葉が大好きです。私たちは毎日、キリストから

「お前は今日、私と一緒に一日、パラダイスだよ」

と言われる。朝の祈りの中で。どんな苦しみ悩みも、このキリストと一緒に、またキリストがわがうちに在り給う、その現実がパラダイスです。その内実が天国。

「御国をきたらせたまえ」

というのは、実は御国は来ているんです。「御国」とは神さまが支配しているところ。天国。「神さまが支配している」と言つたつて、なにか律法的に支配しているのではない。愛の力で統べていらつしやる。愛の力でもつてそこを統御していらつしやる。愛の力で治めているところをパラダイスというんです。だから、キリストと共に、キリストの中に在る世界が即ち、御国です。

「御国をきたらせたまえ」という祈りは、御霊に在つて御国が私たちの中に来なければ、本当の祈りにならない。必ず来ます。来ているんだから。今、現に、終末的現実が私たちの中に来ている。だから、必ず歴史的にいつて、最後の終末の黙示録が語つているところの新天地は必ず来る。

黙示録のあの幻のごとく来るかは、それは分からんですよ。あの時にはあのように靈示されてきたけれども、あれはひとつの暗号ですからね。聖書は全部、暗号ですよ。その時には、それがどういう現実になるかは、誰か知らんやだ。その時もその内容も知らん。けれども、聖書が示しているところのその時示されたものは本ものですから。それがどういう形で来るかは、それはいろいろで分からない。しかし、それが示しているところのもつと素晴らしい内容が来るに相違ない。空望でなくて、示されているところの事態のもの凄い内容が来るということです。

私たちは、キリストをいただいているときにはもう天国ですから、私たち自身が天国体ですから、必ず御国は来るんです。いつ死んでも、「アーメン・ハレルヤ」というわけです。それは誰だつて死ねば悲しいよね。けれども、涙を通して、もの凄い凱歌になってくる、キリスト教は。お葬式は、

「誰々さん、ハレルヤ、万歳！」

というわけです。それは本当に次の世界に行つて、この地上よりかもつと成長していくんですよ、あちら側に行くと。非常に靈的な人は、次の世界のそういった姿を見る人がある。魂の霊界は、パウロが言っているとおり、霊体をいただく世界ですから。それをハッキリ示したのがキリストの復活体です。キリストの霊体、復活体というのは、肉体がただ元に戻つたのではない。キリストの肉体はもの凄いあれでもつて靈化してしまうわけです。



「地上の墓はその人生の終極ではない」

と、ロングフェローの詩にあるとおり。ブラウニングも、

「私がもし死んだら、凱歌をあげてくれ」

と言っている。この聖書の世界は希望満々たるものです。

「青年よ、大志を抱け」

と言うけれども、「大志」（アンビション）は上から来ているんだ。

●まず、神主義ということ

どういうことをなさつていても、それが天下一品になる。天的な質を持っているから。

「どうも、私はこういう才能がなくて。あの人はずいぶん才能があつて、神さまは不公平だな」

なんて、そうじゃないです。一人びとりは他の人とは代えがたいもの——皆さん、顔が全く同じ人がいますか、世界中にAさんという顔は一つしかない。何憶人いようが、みんな一人びとり顔がちがつている——そういった掛け替えのないものなんです。相対的な存在でありながら絶対性をいただいている。

創造者である神さま、大芸術家がそのように作品をしているんだ。地上のどんな芸術家も神さまの芸術作品にはかなわないですよ。みんなそういう神品しんぴんなんだ。でき損ないは一つもない。人間の目には、でき損ないのように見えても。問題は、その創造者の創造の霊、力、質、それをいただくこと。神さまは与えようとしてしょうがない。一人びとりは、相対性でありながら絶対性を持つているから。なぜ絶対かというところ、この神さまとの関係があるから絶対なんです。ところが、この関係を切つて、自分を絶対化するからおかしなことになる。イズムだとか、セクトだとか言つて。

政治だつてそうですよ。主義にはそれぞれ真理性はあります。けれども、みんな限界を持つている。相手の中にもいいものがある。ちゃんとそれを見なさい。そうしたら、それが本当に総合的になる。それはこの絶対性を見ているから。この絶対性がこの相対の中にあるかということだけが問題。それが見えてくれば、それぞれが本当に協力できて、喧嘩にはならないわけです。人の言うことを何でも否定するようなことを言つてはいかん。

今の民主主義は、「民主」の上に「神主しんしゅ」がない。まず、神主義ということを言つてもいい。神主があつて、それから民主ならいいけれども。民主を手放しで言うから、勝手主義になる。日本ではただ民主主義がお題目になっている。リンカーンのあの有名な3分間演説で、

「オブ・ザ・ピープル、バイ・ザ・ピープル、フォア・ザ・ピープル」

（人民の、人民による、人民のための）

の前に、



「アンダー・ゴッド」（神の下において）

ということをちゃんと saying している。ところが、日本人はこの「神の下に」を抜かしてしまつて、「ピープル」だけ叫んでいるんだ。全く情けないね。

とにかく、宗教心というものが——インチキな宗教でなければ、キリスト教でなくたっていいですよ——宗教心というものを土台にしなければならぬ。そのことをハッキリ言わないものだからね、教育者が。仏教でもキリスト教でもいいから、とにかく本ものを掴んでいけば、それをなにも教場でいきなり言わなくたっていいから。

日本の精神界は絶望状態です。絶望なら、徹底的に絶望すればいい。そして、希望はどこにあるかと捜せばいい。ところが、その絶望も知らないで、いい加減なもので誤魔化してしまうから、困つたものだ。

●希望も即ち現

福音を受けとつていらっしゃる方々は本当に存在的に使命を負っている。ただキリスト教をやっているなんていうことではないんですから。何をやってらっしゃってもいい。そこでもつて本当に光を発すれば。キリストは、

「汝らは世の光なり」

と言われた。ということは、「私の栄光を現せ」ということです。

「私を受けとつて、その仕事を通して栄光を現してくれ」

と。ルターが言つた「自由」は、神における、キリストにおける自由であつて、自分で手放して私する自由ではなかつた。それを自由のはき違えをしているから困つたものだ。

パウロは、「万物の呻き、クリスチャンの呻き」を言っている。しかし、その呻きは神さまの希望があるから、必ずこれは歓喜に変わる。

ベートーベン第九シンフォニーを作りました。彼は聾者になつて絶望して、ドナウ河に身を投じようと思つて、ハイリゲンシュタットで遺言状を書いた。もうちょっとで自殺しようとしたが、彼は思いとどまつた。

「この音楽は、悩める人、悲しめる人のためにやるんだ」

と。彼はキリストの愛に、神の愛に迫られて全うしたわけです。それで、あの「苦難を通して歓喜へ」という——いや実に苦難の中に彼は歓喜を受けとつて——シラーの「喜びに寄す」という詩をあの中にはめこんだ。あの大希望の、大歓喜の歌を、曲を年末にはやるけれども、シラーやベートーベンの本当の悲願をもつて聞いているか、悲願をもつて歌っているか。さすがにドイツの合唱隊は違うということを感じます。

我々クリスチャンの讃美歌、聖歌、これはみんな詰まるところは、福音の喜びと福音の大希望を歌っているわけですよ。そういう意味において、クリスチャンは実は、希望をも現実にしなくては。さきほど言いましたね、



「信は即ち現^{うつ}である」

と。希望も即ち現なんです。天国は来ているんですから。希望もやはり現在のなんです。現在持っている。希望の成就した世界を、双葉の姿で持っている。だから、願望ではない。必ず来るんです。

●希望は未来の新天地、終末の世界

十字架の贖いを土台としたところの、そして聖霊をいただいているところの信。希望も同じくこの現在において——希望は普通なら未来ですね——受けとる。キリストの十字架は相対的歴史的には過去です。二千年前にキリストは十字架にかかりました。これは宗教的天才が殉教の死を遂げたというのではない。これは特別な死ですから。贖罪ですから。キリストはいきなり天界へ行くことができた。けれども、罪の贖いのため、キリストはゲツセネマで神さまから、

「お前は罪の贖いのためにこれを受けとれ」

と。イザヤ書53章をハッキリ彼はつかまえて、そして十字架に進まれたわけでしょ。天の万軍を呼び寄せれば、ローマの兵隊なんかやつつけることができたんだけど。しかし、いきなり天界へ行ってしまったら、それでは贖罪をしなくなってしまう。我々はいきなり天界へ行くことが、キリストの真似ができますか。できやしない。

「十字架につけられたままのキリストを」

とパウロが言っている。その過去の十字架はいつも現在に、即ち、この十字架の恩寵を現在において受けとっている。希望は未来、未来の新天地、終末の世界。その終末を今、終末的現在として、今、天国をここにいただいている。過去を現在において体験し、未来を現在においてやはり受けとっている。だから、信仰の世界は非常に現在のなんです。

「明日のことを思い煩うな。今日でたくさんだ」

という。一日が即ち一生である。いや実に、一日は永遠である。現在即永遠という。現在即永遠ということは、神・キリストを有^もつひとは現在において永遠を持っているひと。神・キリストを現在、永遠の生命であるところのキリストを現在持っているから、現在が永遠なんです。だから、地上で何年生きようが、そういう生き方をしなかったらお終い。地上でどんなに早く^{たお}仆れようが、そういう生き方をしている人は永遠である。

そういうのがすべてこの現在です。大体、ユダヤ人の信仰が非常に現在的であった。その点は大変いい。ヘブライ語というのは「完了」と「未完了」しかない。同じ「完了」が、過去完了も現在完了も未来完了も全部持っている。「未完了」は未完了としてある不確かさと、それから、未完了は必ずしも不確かさでない。だから、旧約聖書の翻訳というものは、「この訳が正しい」ということはひとつも言えないんです。ヘブライ語はいわゆるテンズが違うから。それだけ、ヘブライ語というのは非常に弾力性を持っている。三つの、現在・過去・



未来というものを自在に持っている。というのは、非常に永遠の質を持っている。

●最後の霊肉渾然たる救い

²⁴我らは望^{のぞみ}によりて救われたり、眼に見ゆる望は望にあらず、人その見るところを争^いでなお望まんや。

これはパウロはこれでいいけれども、

²⁵我等もし其の見ぬところを望まば、忍耐をもて之を待たん。

と言うけれども、望むところをもちろん忍耐をもつて待ちます。けれども、その望みは既に受けとつているということパウロは言っていないけれども。

聖書というのは、聖書の言葉にこだわってはダメですよ。パウロが言っている、

「儀文は殺し、霊は活かす」

という。パウロやキリストは旧約聖書を読むときに、文字通りなんか読んではいませんよ。その時に、み光によつて彼らは勝手に読んでいる。ホセア書のある言葉なんかは逆にとつている。聖書の言葉は生きていますから、今日読むのと、また明日読むのと違っていいんですよ。「このように解釈しなければならぬ」なんて、そんなものではないですから。その言葉の背後から無限無量なものが表れてきている。

「ああ、そうか、お前はそんなに読んでくれたか」

と言って、むしろパウロさんが喜んでくれる。そういう読み方ができるんだから、この聖霊の世界は。そんなことを言うと、カトリックの方で、「そんな勝手な、主観的な読み方があるか」と言う。主観ではないんです。これは御霊の世界に入らないと、その気合が、またその弾力性が分かりませんけれどもね。

私たちは最後の救いの、霊肉渾然たる救いのところを、切実に存在的に望んでいる。けれども、私たちが今どんなに、肉体は不完全であろうとも——たとえば、病床に横たわつてしまつて動けないような人がある——けれども、この人が本当に祈りの世界に入ったら、そこらを活動しているよりもっと凄い霊の活動ができるんです。そして、祈りの力が一番強い。祈りの力が強いということは、祈りに入つてくるところのものが強いということです。いわゆる信念ではない。祈りにおいて、そこに現象してくるところの事態がもの凄いのものを持っている。だから、この病人が実は、いい加減な活動をしている人よりかはるかに素晴らしい活動を祈りの世界でする。人を支える。人のために執り成している。そういうことになる。相対界とこの絶対界が一つになっていますから。これがやはり、天地一如です。

「御意の天に成るごとく地にも成らせ給え」

とは、

「御意の天に成るごとく地に、この地上の我々において、成してください」



ということですよ。

「どうぞ、この地上において私たちを通して」

と。これが主の祈りの中心でしょう。そして、御意の天に成るごとく地に本当に成ってしまっているのがキリストですよ。イエスが地上においては、全く天界の通りに地界において彼は神さまの事態を現象している。福音書はキリストの天国がどんどん現れているわけだ。

●キリストという原始力

イザヤ書35章を開きましょうか。キリストはもうちゃんとそこで実証してしまっただ。

「¹荒野とuringおいなき地とはたのしみ、²沙漠はよろこびて番紅の花のごとくに咲きかがやかん。³盛んに咲きかがやきてよろこび且よろこび且うたい、レバノンの栄をえ、カルメルおよびシャロンの美しきを得ん。かれらはエホバのさかえを見、われらの神のうるわしきを見るべし。

⁴なんじら萎たる手をつよくし弱りたる膝をすこやかにせよ。⁵心さわがしきものに対していえ、なんじら雄々しかれ懼るるなかれ。なんじらの神をみよ、⁶刑罰きたり神の報きたらん。神きたりてなんじらを救いたもうべし。

⁷そのとき聳者の目はひらけ聳者の耳はあくことを得べし。⁸そのとき跛者は鹿の如くにとびはしり、啞者の舌はうたうたわん。そは荒野に水わきいで、

沙漠に川ながるべければなり。」(イザヤ35・1～6)

「跛者は鹿の如く」と、これはみんなキリストはやってしまった。まあ、大変なひとですよ、イエスというひとは。

キリストに来て、驚嘆驚倒して、「参りました！」と言ってキリストの中に自分を投げ込むようなことでなければ、本当の信の世界は来ない。「研究」なんかでやったのでは。私はハッキリ言いますから。本当に驚き——「こんなことがあるか」なんて言っているうちはダメなんです——本当に驚いて、「参りました！」と言って、キリストの中に自分を投げ込んでごらん。もの凄いことになってくるから。福音の事態はそういう事態なんです。

原子力というけれども、私は原始の力、「原始力」と書く。イエス・キリスト自身がこの「ウル・クラフト」「原始力」なんです。キリストという原始力に、

「福音は言葉にあらず、力なり」

とパウロが言った。それはそのことを言っている。キリストという原始力に來たら、もう他には何も要らん。

「無一物無尽蔵」と禅宗で言いますが、「無一物無尽蔵」は本当にクリスチャンがその世界を有つ。禅宗の悟りとか無とかよりはるかに素晴らしい内容ですから。私は、禅宗の本は面白いから、『碧眼録』や『無門関』なんかを読んでもすけれども。みんなキリストの光で



読めるんだから、楽に。

ちつとも難しくないですよ。皆さん、御霊の世界に来てごらん下さい。ゲートといえども、ダンテといえども、ドスエフスキーといえども、何でも読めてしまう。シェイクスピアでも何でも。彼らはみんな聖書を元に行っている。聖書が源泉なんだから。それなのに、聖書をそっちのけにして、ベートーベンだ、バッハだ、何だかんだと言ったってダメですよ。音楽家だって結局、そこに戻らなければ、彼らを本当につかめない。レンブラントにしろ、ダビンチにしろ、何しろみんなそうなんです、元は。第一級の人物はみんな霊的ですからね。

●福音は万人のために絶対無条件

あなた方自身がみな第一級になれるんです、この聖霊の世界では。器の大小は神さまがいろいろ造っている。けれども、質的には全部、同じ質に入る。だから、福音は万人のために絶対無条件です。最高最深なものは誰でもが得られるんです。「どれだけ勉強しなければ」なんて、そんなことではない。満々たる、「希望」なんていう言葉でも表せられないような事態が展開して、もう生命に溢れてしまう。

それは本当にパウロさんを見てください。そうだったから。何といつても、キリストの次はパウロです。ヨハネは黙示の方では凄くけれども。パウロ、ヨハネ、ペテロ、それぞれみんな色彩を持っている。パウロはどちらかというと、信仰の権化みたいなやつ。ヨハネは愛です。ペテロは希望。信・望・愛が、パウロ・ペテロ・ヨハネがちょうど性格的に表しているようなものです。言っていること、やっていることは違う。けれども、みんな同じ源泉から出ているから、ヨハネを読めばヨハネになるし、パウロを読めばパウロになるし、ペテロを読めばペテロになれる。なぜなれるかというと、キリストからきているから。

この御霊の世界にきますと、花を見れば花となり。木を見れば木となり、星を見れば星となり、風を見れば風となる。嵐が来たら、ああいいなあと。本当にそういう気持ちになれる。そうすると、船に乗っても酔わない。船が揺れれば、こっちが波になる。そういう境地に入ったら、あの玄界灘で最後まで酔わなかったのは私だものね、やっぱり。それはそういう境地に入るから。波ごころに。禅宗でいう柔軟心です。柳に雪折れなしという。何にでも同化してしまう。同化してダメになるのではなくて、同化してその世界を霊的な神の生命の中に入れていく。自然界が本当に自分と連なりがあることが分かる。

その点で、本当に自然を愛し、自然と一つになったのはドイツの大詩人ゲーテです。彼は、「神・自然・我」というものが融合していた。ゲーテという人は案外、私心のない人だから。ゲーテの文学がなぜ凄いかというと、そういうわけだからです。ゲーテ研究の本は毎年一番出ています。いくら研究したって尽くせない。けれども、彼ら研究家が本当にゲーテの一番奥をつかんでいるかは、極めて少ない。「神・自然・我」ということを外側から説明しますよ。けれども、それを本当に内側から受けとっているか。



福音もそうですよ。福音について語る人や、福音について書く人はたくさんいる。福音の中からものを言わなかったら、これは本ものでない。「の中から」です。さつきから申し上げている、「中」の世界ですから。「について」ではない。論文はみな「何々について」書くけれども。

西田幾多郎という哲学者は——あれは哲人と言いたいけれども——あっちの本、こっちの本をたくさん読んでいます。けれども、それをいわゆる引用して辻褄を合わせたような論文は書かない。もうそんなのはみな消化してしまって、創造的に書く。第一級のはみな創造的です。神さまの創造的な、クリエイティブなそういう姿になってくる。こだわらない。楽しくてしょうがない。

●癌は根底からは治されている

²⁶斯^かのごとく御霊も我らの弱^{よわ}きを助けたもう。我らは如何に祈るべきかを知らざれども、御霊みずから言い難き嘆きをもて執成し給う。

素晴らしい一番深い言葉です。我々の悲願は、御霊が本願をもつて執り成してください。

私たちの祈りは、聞かれているか、聞かれていないか。キリストは言われたね、

「祈りたることは聞かれたりとせよ」

と、完的に。けれども、

「そういうんだけれども、ちつとも聞かれてないじゃないか。まだ私は祈りが足り

ないか」

なんて。それは足りないときもあるでしょう。けれども、祈る前に、お願いする前に、まずキリストの中に入ってくださいというわけです。キリストの中に祈り込むことがまず第一です。それから、お願いは何でもしてください。そうしたらば、そのお願いはいわゆる我執的な祈りでなくなる。みなそこにおいて神の栄光の表れんがための祈りになってくる。ですから、中へ入って祈る祈りは必ず聞かれています。それは現象しないかもしれませんが。けれども、根源の現実では現象しているんです、根源の現実では。

病の世界でも、癌が治らない。けれども、その角度から祈っているときには、癌は根底からは治されている。その人はいは癌で死ぬかもしれない。けれども、それは治されている。祈りはそこまでの気合をもつていかなければダメなんです。正直、癌が治った例もあります。

いつも平伏^{ひれふ}していかなくてはいかん。平伏しの魂です。平伏しの魂に本当の権威がくる。もし、平伏しなかったら、その権威はへたすると今度は傲慢になる。霊的なことが切り替わって、サタンの手下になる。サタンも霊的ですから。マルコ伝5章に書いてある。悪鬼にとりつかれたやつが一番先にキリストのことを神の子と言った。そしたら、キリストは、「我を表すな」と言われた。即ち、悪鬼は相手が神の子、キリストであることが分かるんです。



普通の人には分からないけれども。ペテロが告白するよりかはるか前にちゃんと悪鬼がそう言っているんだ、キリストのことを。霊界というものはそういうものですから。

御霊は私たちの祈りを執り成す。そして、キリストの中に入って祈っている祈りは必ず聞かれている。自分を投げ出した幼児^{おさない}の心。キリストが一番大事にされたのは幼児です。幼児は単純なんです。自分を本当にそのときに、瞬間に自分を打ち込んで分裂していない。あの分裂してない姿がいいんだと、キリストは。あんまりとやかく考えすぎるなど。

今の若い人は、

「われ思う故にわれ在り」

で困るよな。デカルトが余計なことを言ったものだから。「われ思う故にわれ在り」ではない。「われ思う故にわれ迷う」だ。思っただけだと迷ってしまう。非難ばかりしている。そんなものは捨ててしまう。幼児^{おさない}の単純さをもってすることです。

幼児^{とこ}を止めようとしたら、キリストは怒ったでしょ、

「止むな。神の国はかくのごとき者のものだ。みんな幼児^{おさない}には守り天使がいるぞ。幼児^{とこ}をばかにするやつは首に石臼^{うす}を括り付けて海に沈められた方がましだ」

なんて。キリストの言葉は烈しいですからね。また、シラーという人が、

「人間は遊んでいるときに一番人間らしい」

と言っている。というのは、遊んでいるときは楽しいからね。そのときに一番その姿が表れるという。しかし、私は学遊一如と言う。本当に学ぶことが好きで、勉強することが好きなら、その打ち込んでいる姿はやはり遊んでいるのと同じことだ。とにかく、全身を打ち込んでいる姿が一番いい。我無き世界です。

●信は同時に大希望につながる

そういう意味において、祈りというものは、打ち込んだときには必ずそれ以上に聞かれている。現象は、反対に出てきても、神さまはその奥でもってその祈りを聞いていてくださる。だから、いわゆる祈りが聞かれようが、聞かれまいが、自分が本当にその角度で祈っているときには、神さまは最善をなしていらつしやる。信仰は、そこまで来ないと、今にぐらついてしまう。神さまは、我々の判断では分からないことがたくさんあるよ、矛盾だらけのようで、出鱈目^{でたらめ}のようで。

キリストも、

「わが神、わが神、なんぞ我を棄て給いし」

と仰った。

「こんなに、あなたに私は信頼しつくしたのに、なぜ、私をお棄てなさるか」と。義が貫いているんだ、彼は。神の義がキリストを貫いている。



「この義が倒れてどうするか」

という意味ですよね、「なんぞ、我を棄て給いし」というのは。この義が倒れてどうするかと。しかし、あの叫びが非常に大事な叫びです。神の義を宣言しているんです、「なんぞ、我を棄て給いし」というのは。いわゆる我ではないんです、あの「我」は。

「こんなにあなたに従っていたこの私を棄てて、どうなさるか」ということは、

「この神の義が、乾坤^{けんこん}を貫いている義が、これが倒れてはいかん。これを棄てたように見えるのは、実は十字架の贖いだ。あなたは棄てなさったのではない」

と。そのことはちゃんと奥を受けとっているから、「わが魂を汝に委ぬ^{ゆだ}」と言われた。

「三日目には甦るぞ」

と、ちゃんと宣言しておられるんだ、三度も。矛盾しているようだが、そこがいわゆる組織神学ではないんです。絶対な矛盾の構造を持っている。矛盾しながら大調和を持っている。

私は第一巻（小池辰雄著作集第一巻『無者キリスト』）の第三部の序言に書きました。

「ちよつと見ると、ひどい神さまだが、このひどい神さまを本当に信じぬか。それだけ、信の世界は凄いんだ。そうしたら、何がどうなっても大丈夫だぞ」

ということ。その信は同時に、大希望につながるんです。

「最後の審判」という言葉がありますが、神さまはすべてを全くその善きになさる。地上でどんなに計算が合わなくても、大きな計算はちゃんと合っているんです、神の歴史においては。だから、人にどう思われようと、どんなにけなされようと、どんな判断を受けようと、一向差し支えない。この地上でご褒美なんか要らんですよ。ご褒美は神さまからくる。勲章だとか何だとかいろいろ問題にしているけれども、そんなのは要らん。

● 私たちはキリストの栄光の姿に化せられる

御霊において既に、神の国を、神の国の中心であるキリストをいただいているところに希望の中心があります。希望は既に現在においていただいていますから、現在、終末的現在をいただいていますから、希望の内容は必ず成る。そこで、私たちは、神さまの創造の最後の日に対してもの凄い希望をもって、その時を本当に待ち望んでいく。この大希望があるから、どんなことに遭っても、ひとつもへこたれない。いわゆるロマンティズムではないですよ。どんな浪漫主義も、このキリストが、福音が与えているところの大希望にはかなわないですから。イデアリズムも理想主義もダメです。理想は現在にきているんだから。「父の全き」は御霊において私たちの中に来ているんだから。

そんなことは人間の思想からは出てこない。どんな大哲学者も大思想家も。だから、本当の大思想は実は聖書が持っている。その聖書を、何を読んでるかとか正直言いたいです。皆さん、この聖書は、何か七面倒くさい研究なんかよしてください。これは身体で読ん



てください。これは劇なんだから。劇の中の活人物になる。これはみな「活字」なんだ。活字というのは活きている文字ということ。印刷されているのが活字だとみんな思っているけれども、私は「活字」というのは活きている文字と思っている。聖書は正に活字なんだ。漢字というのは世界最高の文字ですよ。「無」という字は、「天蓋の下に甘、甘の林」という字で、大空の下四十の林の木の数に数えられるかという。数えられない。無は無数を表している。無即無数、無即無限無量ということを漢字が表している。「法」というのも「水は流れ去る」という字で、水は低きに流れ去る。これは物理法則。この姿を見て「法」という字を作った。

だから、聖書を読んでいると、読んでいてグーッと力がくる。これは身体で読んでいるとね。

²⁹神は予^{あらか}じめ知りたもう者を御子の像^{かたち}に象らせんと予め定め給えり。これ多くの兄弟のうちに、御子を嫡子^{ちやくし}たらせんが為なり。³⁰又その予め定めたる者を召し、召したる者を義とし、義としたる者には光榮を得させ給う。

パウロは他の書簡でも、

「ついに栄光より栄光に至りて、キリストの姿に化するなり」

と書いてある。キリストの姿に化する。キリストは神の姿です。私たちはキリストの栄光の姿に化せられる。一人びとりがみな類型的になるのではないですよ。お一人おひとりとはみな天下一品の姿で、しかも、キリストの姿になる。キリストの姿を宿している人になる。これが私たちの個人の最後の希望です。最後はみなキリストの姿に化する。そして、みんなそれぞれ千変万化であります。それが大ハーモニーになる。大きな交響楽に。歌を歌えば、ヘンデルの「メシヤス」もかなわない。

人はもともと神の似姿に造られている。あの「似姿」という言い方はよくない。あれは「同質」なんだ。「ツエレム・ハー・エロヒム」という、神さまの同じ姿に、同質の姿に、本質的に——ホモウジオス。アタナシウスとアリウスの論争で、キリストは神に「似て」いるか、神と「同質」かと。アタナシウスの「同質」の方が勝ったわけです。あれと同じです——我々も本来、神と同質に造られていたのが、ズレてしまった。キリストがその同質性をもう一遍私たちに与えてくださった。御霊をもつて。だから、キリストの姿に必ず化する。これが個人の実存の最後の希望がそこにかかってくる。

世界は神の国の本当の姿、天国、新天新地に——「新天新地」と言ったって、ただそういう言い方をするだけのはなし——そして、キリストを新郎としてみんなが新婦になるという。キリストとエクレシア、教会の関係です。

ブルンナーという人が、『教会の誤解』という本を書いた。教会の本質をよくついた本です。現実の教会がだいたいそれに当てはまらないものだから、ブルンナーの本は教会ではあまり買われない。痛いものだから。ダメですよ。本当の教会は正にブルンナーが言っているとおりです。御霊がないところには本当の教会はない。



●幕屋の構造

私は、「幕屋」ということを1942年4月28日に病床でもって示された。旧約聖書を読んでいたら、「幕屋」ということがたくさん書いてある。そして、幕屋を冥想していたら、神・キリストの大黒柱（垂線 $g \cdot x$ ）を持ったところの天幕（三角垂体 $a \cdot b \cdot c \cdot g$ ）の構造を示された。底面の三角形 $a \cdot b \cdot c$ が人間の社会構造を一番簡単にしたもので、これをどんなに平和にしようとしたってダメなんです、横では。底面の各頂点（ $a \cdot b \cdot c$ ）が神（ g 、頂点）・キリスト（ x 、底面の中心点）と縦の線を結んでないと。天幕の中には聖霊（ p ）が充満している。 $a \cdot b \cdot c$ はみんな、「神・キリスト・聖霊」（ $g \cdot x \cdot p$ ）という公分母を持っている。みんな、神・キリスト・聖霊をいただいている人なら、これが本当の教会です。この縦の線は各個人の平安の線です。神・キリストとの心の交わり、魂の交わりを平安という。平安には神・キリストの力がある。ただ静かなのではない。そうすると、ここに初めて $a \cdot b \cdot c$ の関係が環状になる。環のように円現してくる。円環関係になる。これが貫流する。「神・キリスト・聖霊」が貫き流れてくると、貫流すると、今度は環流する。環の流れになる。平安があつて初めて平和になる。平和運動なんていくらやったら、上からのこの線を持たなければ、こっちはお互いに流れてこない。だから、いくら平和運動をやったって、そんなものは偽りですよと言う。この縦の関係を、義の関係を通さなければ、この愛の関係は出てきません。そういうことで、どうぞ皆さんは、もし運動するなら、平安運動をやってください。平和運動ではなく。

「汝ら、心安かれ、我なり」

と。ペテロたちの舟が嵐で引っくり返りそうになった時に、キリストは湖の上を渡って来て、そう言つたでしょ。

「我なり、^{おそ}懼るな。心安かれ」

と。ということとは、

「私に來れば、私に連なっていれば、本当の平安だ」

ということ。平安から平和がくるので、平安ぬきの平和なんてものはありません。ハッキリしてます。どうして、世の人たちは、「宗教」と言うとか何か特別なものと思うのでしょうか。これくらい一番当たり前の世界はないわけです。空気が当たり前で吸っているように、霊気は、魂が霊気を吸っている世界なんだ。

希望というのは、そういう角度から、私たちが本当に現在に——さっきお話したようにこっち（未来）から来ている——現在に持っている。十字架も現在に持っている。現在において、信と望とがやはり一つになっている。そして、最後はローマ書8章の31節からパウロが絶叫している世界です。

